

世界文学全集

17

ドストエーフスキイ

罪と罰

米川正夫訳

河出書房

© 1969



カラー版 世界文学全集 第17巻

ドストエーフスキイ 罪と罰

昭和 41 年 9 月 15 日初版発行
昭和 44 年 7 月 1 日 3 版発行

訳 者 米川正夫

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

印刷者 澤村嘉一

印 刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定 価 750 円

製 本・加藤製本株式会社
製 函・加藤製函印刷株式会社
本文用紙・三菱製紙株式会社
表 紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京(292) 3711(大代表)・振替口座 東京 10802

目 次

罪 と 罰

第 1 編	5
第 2 編	66
第 3 編	145
第 4 編	209
第 5 編	271
第 6 編	331
エビログ	405
年 表	417
解 説	425

巻頭口絵 ドストエーフスキイ肖像
(国立トレチャコフ美術館—APN特写)
V・ペローフ筆 (1873年)

本文カラーさし絵
チャールズ・ミコライチャック
© 1966 Charles Mikolaycak
装 幀 亀倉雄策

罪 と 罰

米
川
正
夫
訳

主要人物

ラスコーリニコフ（ロジオン・ロマーヌイチ）（ロージャヤ）

この小説の主人公。もと大学生。美貌で、非凡な頭腦の持ち主であるが、徹底した個人主義者。意志の自由な発現こそ人間個性存在の究極の真理であると確信し、非凡人の理論を設定して、金貨しの老婆アリョーナを殺害する。

ブリヘーリヤ・アレクサンドロヴナ・ラスコーリニコヴァ

ラスコーリニコフの母親。

アヴドーチヤ・ロマーノヴナ（ドゥーニヤ） ラスコーリニコフの妹。兄に似て賢く、氣位の高い、はげしい氣性の、美しい婦人。

ラズーミヒン（ドミートリイ・プロコーフィチ） ラスコーリニコフの友人。善良な好人物で、ラスコーリニコフ一家に献身的な愛情を持つ。

マルメラードフ（セミョーン・ザハールイチ） もと官吏。アルコール中毒のため、一家を窮乏のどん底におとし入れ、ついに馬車にひかれて死ぬ。

カチエリーナ・イヴァーノヴナ マルメラードフの後妻。三人の幼児をかかえ、貧苦と病苦のため半狂乱の女。

ソフィヤ・セミョーノヴナ・マルメラードヴァ（ソーニヤ）

マルメラードフの娘。一家の窮迫を救うため売春婦となるが、純真で信仰あつく、善なる魂の持ち主。

スヴィドリガイロフ（アルカージイ・イヴァーヌイチ） この小説の副主人公。主人公以上に自意志の絶対肯定者で、魂そのものが悪なる意志からなっている人物。

ビョートル・ベトロヴィイチ・ルージン ドゥーニヤの許婚者。野心満々たる卑劣な成り上がり者。

レベジャートニコフ（アンドレイ・セミョーヌイチ） 単純な、付和雷同型の暴露主義者。

アリョーナ・イヴァーノヴナ 強欲非道な高利貸の老婆。

リザヴェータ・イヴァーノヴナ アリョーナの義理の妹。古着屋。信仰あつい、愚鈍なまで善良な女。

ボルフィーリイ・ベトロヴィイチ 明哲な予審判事。

ニコジーム・フォミッチ 警察署長。

イリヤー・ベトロヴィイチ 火薬中尉というあだ名の副署長。

ザミョートフ（アレクサンドル・グリゴリーチ） 警察事務官。ラズーミヒンの友人。

第 1 編

七月の初め、^{ほう}男もなく暑い時分の夕方ちかく、ひとりの青年が、借家人からも又借りしているS横町の^{こぶや}小部屋から通りへ出て、なんとなく思いきりわるそうにのろのろと、K橋のほうへ足を向けた。

青年はうまく階段で主婦と出くわさないですんだ。彼の小部屋は高い五階家の屋根裏にあつて、住まいというよりむしろ戸だなに近かった。女中とまかないつきで彼にこの部屋を貸していた下宿の主婦は、一階下の別なアパートに住んでいたので、通りへ出ようと思うと、たいていいつも階段に向かつていっばいあけつ放しになっている主婦の台所わきを、いやでも通らなければならなかった。そしてそのつど、青年はそばを通りすぎながら、一種病的なおくびような気持ちを感じた。彼は自分でもその気持ちを恥じて、顔をしかめるのであった。下宿の借金がかさんでいたので、主婦と顔を合わすのがこわかったのである。

もっとも、彼はそれほどおくびようで、いじけきっていたわけではなく、むしろその反対なくらいだった。が、いつのころからか、ヒポコンデリイに類したいらだたしい、はりつめた気分になっていた。すっかり自分というものの中にとじこもり、すべての人から遠ざかっていたので、下宿の主婦のみならず、いっさい人に会うのを恐れていたの

である。彼は貧乏におしひしがれていた。けれども、この逼迫した状態すらも、このごろ彼はあまり苦にしなくなった。その日その日の当面の仕事もぜんぜん放擲してしまい、そんなことにかかずらう気にもならなかったのである。彼は正直なところ、どこのどのような主婦がいかなることを企てようと、けっして恐れなどしなかった。けれど階段の上に立ちどまらされて、なんの役にもたたない平凡なごみごみした話や、うるさい払いの督促や、おどかしや、泣き言などを聞かされたうえ、自分のほうでもごまかしたり、あやまつたり、うそをついたりするよりは——猫のように階段をすべり下りて、だれにも見られないように、ちよろりと姿をくらますほうが、まだしもなのであった。とはいえ、こんどは通りへ出てしまうと、借りのある女に会うのを、こんなに恐れているということが、われながらぎよっとするほど彼を驚かした。

『あれだけのことを断行しようと思っているのに、こんなくだらないことでびくつくなんて！』奇妙な微笑を浮かべながら、彼はこう考えた。『ふん……そうだ……いっさいの事は人間の掌中にあるんだが、ただただおくびようのために万事鼻っ先を素通りさせてしまふんだ……これはもう確かに原理だ……ところで、いったい人間は何をもっとも恐れているだろう？ 新しい一步、新しい自分自身の言葉、これを何よりも恐れているんだ……だが、おれはあんまりしゃべりすぎる。つまりしゃべりすぎるから、なんにもしないのだ。もっとも、なんにもしないからしゃべるのかも知れない。これはおれが先月ひと月、夜も昼もあのすみつきにごろごろして……昔話みたいなことを考えているうちに、しゃべることを覚えたのだ。それはそうと、なんだっておれは今ほつき歩いているんだらう？ いったいおれがおれにできるのだらうか？ そもそもおれがまじめな話だらうか？ なんの、まじめな話どころか、ただ空想のための空想で、自慰にすぎないのだ。玩具だ！ そう、玩具というのがほんとにうらしいな！』

通りは恐ろしい騒ぎだった。そのうえ、息ぐるしき、雑踏、至ると

ころに行きあたる石灰、建築の足場、れんが、ほこり、別荘を借りる力のないベテルブルグ人のだれでもが知りぬいている特殊な夏の悪臭——これらすべてが一つになって、それでなくてさえ衰えきっている青年の神経を、いよいよ不愉快にゆさぶるのであった。市内のこの界限にとくにおびたらしい酒場の、たえがたい臭気、祭日でもないのにひっきりなしにぶつかる酔漢などが、こうした情景のいとわしい憂鬱な色彩をいやが上に深めているのであった。深い嫌悪の情が、青年のきょろきょろ顔面をちらとくすめた。ついでにいつておくが、彼は美しい黒い目にくり色の毛をしたすばらしい美男子で、背は中背より高く、ほっそりとしてかつこがよかつた。けれど、彼はすぐに深い瞑想、というよりむしろ一種の自己忘却におちたようなあんなばいで、もう周囲のものに気がつかず、また気をつけようともせず先へ先へと歩きだした。どうかすると、いましがた自分で自認したひとり言の聲が出て、何かしら口の中でおつぶつという。この瞬間、彼は考えが時おりこぐらかつて、からだに極度に衰弱しているのを自分でも意識した——ほとんどもう二日というものの、まったくものを食わなかったのである。

彼はなんともいえないみずばらしいなりをしていて、ほかの者なら、かなりなれっこになった人間でも、こんなばろを着て、昼日なかりへ出るのには、気がさすに相違ないほどである。しかしこの界限ときたら、服装などで人をびっくりさせるのは、ちょっとむずかしいところだった。センナヤ（乾草広場）に近く接している位置の関係、おびたらしい木賃宿や長屋の数々、それからとりわけ、こち中部ベテルブルグの町や横町にこみこみ集まっている職工や労働者などの群れ——こういうものがときどきその辺の街の風景に思いついて、ひどい風体の人物を織りこむので、変わった姿に出会って驚くのは、かえって変なくらいのものであった。そのうえ青年の心の中には、毒々しい悔度の念がはげしく鬱積していたので、若々しい——時としてはあまりに若々しい神経質なところがあるにもかかわらず、彼は町なか

でそのぼろ服を恥じようななどは、てんで考えもしなかった。もつとも、ある種の知人とか、一般に会うのを好まない昔の友人とか、そんなものに出くわすのは、おのずから別問題である……とはいえ、たくましい運送馬にひかれた大きな荷馬車に乗った酔漢が、今ごろこの町なかをどうして、どこへ運ばれて行くのかかわらないが、通りすがりに「やあい、このドイッシャッぽー！」といきなりどなって、手を彼を指さしながら、のどいっぱいにわめきだしたとき——青年はふいに立ちどまり、癡癡したような手つきで自分の帽子を押さえた。それは山の高いチンメルマン製の丸形帽子だったが、もうくたびれきってすっかりにんじん色になり、穴だらけしみただらけで、つばは取れてしまいい、そのうえつぶれた一方の角が、見ぐるしくも横のほうへ突き出ている。しかし、彼をとらえたのは羞恥の情ではなく、まったく別な、むしろ驚愕に似た気持ちだった。

「おれもそんなことだろうと、気がついてたんだ！」と彼はどきまぎしてつぶやいた。「おれもそうは思っていたんだ！——これが一ばんいけないんだ。こんな愚にもつかない、ちよいとしたくだらしないことが、よく計画をぶちこわすものだ！——そうだ、この帽子は目に立ちすぎる、おかしいから目に立つんだ……おれのこのぼろ服には、どうあつても、たといどんな古いせんべいみたいなやつでも、学生帽でなくちゃいけない、こんなお化けじみたものじゃだめだ。こんなのはだれもかぶっちゃいけないや。十町（キロム）先からでも目について、覚えられてしまふ……だいいち、いけないのは、後になって思い出される、それこそりっぱな証拠だ。いまはできるだけ人目に立たぬようにしなくちゃ……小事、小事が大事だ！——こういう小事が、おうおう万事を打ちこわすのだ……」

道のりはいくらでもなかった。彼は家の門口から何歩あるかということまで知っていた——きつかり七百三十四歩。いつだったか空想に熱中していたとき、一度それを数えてみたのだ。そのころ彼はまだ自分でも、この空想を信じていなかった。そしてただ醜悪な、とはいえ魅

力の強い大胆不敵な妄想で、自分をいらさらせるばかりだった。それがひと月たった今では、もう別の目で見えるようになった。そして、自分の無氣力と不決断にたいして、あらゆる自嘲のモノローグをくりかえしながら、いつのまにやらその『醜惡』な空想をすでに一つの計画のように考えなれてしまった。そのくせ相変わらず、自分でも自分を信じていなかったのだが……今もげんにその計画の瀕臨みをするために出かけているのだ。で、彼の胸騒ぎは一步ごとにはげしくなっていた。

彼は心臓のしびれるような感じと、神経性の戦慄を覚えながら、一方の壁はみぞに、いま一方は××町に面している、恐ろしく大きな家に近づいた。この家はすべて無数の小さなアパートになっていて、あらゆる種類の職人——仕立屋、錠前屋、料理女、さまざまなドイツ人、自分のからだで生活している娘、下級官吏などが巣くついている。で、出入りのものが二か所の門の下や、二か所の内庭をうるさいほど往き来するのである。そこには三、四人の庭番が勤めていた。青年はそのひとりにも出会わなかったで、しごく満足のていで門からすぐ右の階段口へ目だたぬようにすべり込んだ。階段は暗くて狭い『裏梯子』だった。が、彼はもう万事心得て研究しつくしていた。彼はこうした条件がごとくく気に入った——こんな暗やみの中だったら、好奇心の強い人の目さえ危険でない。『今からこんなにびくびくして、もしいよいよ実行というだんになったら、いったいどうするのだ？……』四階目へ上りながら、彼はふとそう考えた。ここでは、ある住まいから家具を運び出す兵隊あがりの人夫が、彼の行く手をふさいだ。このアパートには家族持ちのドイツ官吏が住まっていることを、彼は前から知っていた。『はあ、あのドイツ人、引越すんだな。すると、四階には、この階段のこの踊り場には、とうぶん、ばあさんの住まい一つきふさがっていないわけだ……こいつはうまいぞ……万一の場合に』と彼はまた考えて、老婆の住まいのベルを鳴らした。ベルは真鍮でなくブリキで造ったもののように弱々しくがらんと鳴っ

た。こうした家のこうした小さい住まいには、たいていどこでもこういったベルがついている。彼はもうこのベルの音を忘れていたが、今この特殊なひびきがふいに彼にあることを思いおこさせ、はっきりと暗示を与えたようなぐあいだった……彼は思わずびくりとなった。おりふし神経が極度に弱くなっていたのである。しばらくしてからドアがくわすかだけ開かれて、そのすき間から女あるじが、さもうさんくさそうに、客を見まわした。ぎらぎら光る小さな目だけが、やみの中に見える。けれど、踊り場に人が大ぜいいるのを見ると、彼女は元気づいてドアをいっばいにあげた。青年はしきいをまたいで、板壁で仕切られた暗い控え室へはいった。仕切りの向こうは狭い台所になっている。老婆は無言で彼の前へ突つ立ち、もの問いたげに相手を見つめていた。それはいじわるそうな鋭い目と、小さいとがった鼻をした、小柄なかさかさした六十かっこの老婆で、頭には何もかぶっていないかった。ぜんたいに亜麻色をした、白いものの少ない髪には、油をてらてらに塗りこくっている。鶏の足に似た細長い首にはフランネルのぼろがまきつけられ、肩からはこの暑いのに、一面にすり切れて黄いろくなった毛皮の上着がだらりと下がっている。老婆はひっきりなしにせきをしたり、のどを鳴らしたりしていた。彼女を見た青年の目に、なにか特別な表情でもあったのだから、とつぜん老婆の目にはまた先ほど同じ猜疑の色がひらめいた。

「ラスコーリニコフですよ、大学生の。ひと月ばかり前にうかがったことのある……」もつとあいそよくしなくてはいいけないと思ひ出したので、青年はちょっと軽く会釈してこうつぶやいた。

「覚えてますよ、よく覚えてますよ。あなたのみえたことは」と老婆はやはり彼の顔から、例のもの問いたげな目をはなさないで、はっきりといった。

「そこでその……また同じような用でね……」ラスコーリニコフは老婆の疑り深さにおどろき、いささかうろたえぎみで言葉をつづけた。『しかし、このばあはいつもこんなふうなのに、おれはこのまえ気

がつかなかったのかもしれない」と彼は不快な感じをいだきながら心に思った。

老婆は何か考えこんだように、ちょっと黙っていたが、やがてわきのほうへ身をひくと、中へ通ずるドアを指さして、客を通らせながらこういった。

「まあおはいんさい」

青年の通って行ったあまり大きくない部屋は、黄い壁紙をはりつめて、窓に幾鉢かのぜにあおいをのせ、紗のカーテンをかけてあったが、おりしも夕日を受けて、かっと明るく照らし出されていた。『その時も、きつとこんなふうな、日がさしこむにちがいない！……』どうしたわけか、思いがけなくこういう考えがラスコーリニコフの頭にひらめいた。彼はすばしこい視線を部屋の中にあるいっさいのものに走らせて、できるだけ家の様子を研究し、記憶しようとしてつとめた。しかし部屋の中には、何も取り立てていうほどのものはなかった。

家具類はすべてひどく古びた黄い木製品で、ぐつと曲がったバック（よりかり）のある大きな長いすと、その前に置かれた楕円形のテーブルと、窓と窓の間にすえられた鏡つきの化粧台、壁ぎわのいす数脚と、小鳥を持っているドイツ娘を描いた黄い額入りの安っぽい絵——これが全部であった。片すみには燈明が一つ大きなぬ聖像の前で燃えている。全体がなかなか小さざっぱりとして、家具も、床も、つやの出るほどふきこまれて、何もかもてらてら光っている。

「リザヴェータの仕事だな」と青年は考えた。住まい全体ここを見て、ちりつば一つ見つからなかつた。『いんこうな年より後家のところへは、よくこんなふうなきれいになっているものだ』とラスコーリニコフは腹の中で考えつづけ、次の小部屋へ通ずる戸口の前にたらしきたらさのカーテンを、好奇の念をいだきながら横目に見やった。そこには老婆のベッドとたんすが置いてあったが、彼はまだ一度もその中をのぞいたことがなかつた。以上二つの部屋が住まいの全部だった。『で、ご用は？』と老婆は部屋へはいると、いかつい調子でたずね

た。そして、客の顔をまともに見ようとして、さっきのように彼のまんな前に突つ立った。

「賃ぐさを持って来たんですよ、これを！」

彼はポケットから古い平った銀時計を出した。裏ぶたには地球儀が描いてあって、鎖は鉄だった。

「でも、先の口がもう期限ですよ。おとといでひと月たったわけだから」

「じゃ、ひと月分利子を入れます。もう少ししんぼうしてください」

「さあね、しんぼうするとも、すぐに流してしまふとも、そりゃこっちの勝手だからね」

「時計のほうは奮発してもらえますかね、アリョーナ・イヴァーノフナ！」

「ろくでもないものばかり持って来るね、お前さん、こんなものいくらの値うちもありやしないよ。この前あなたにや指輪に二枚も出してあげたけれど、あれだつて宝石屋へ行けば、新しいのが一枚半で買えるんだものね」

「四ルーブリばかり貸してくださいな。受け出しますよ、おやじのだから。じき金がかかるはずになつてゐるんです」

「一ルーブリ半、そして利子は天引き。それでよければ」

「一ルーブリ半！」と青年は叫んだ。

「どうともご勝手に」

老婆はそういって、時計を突つ返した。青年はそれを受け取った。

彼はすっかりむかつ腹を立てて、そのまま帰ろうとしかけたが、この上どこへ行くあてもなし、それにまだほかの用もあつて来たのだと気がつき、すぐに思ひかえた。

「貸してもらおう！」と彼はぶつきらばうにいった。

老婆はポケットへ手を突つこんでかきをさぐりながら、カーテンに仕切られた次の間へ行つた。青年は部屋のまん中にひとり取り残されると、好奇の色をうかべながら聞き耳を立て、あれこれと思ひめぐら

した。老婆のたんすをあける音が聞こえた。『きつと上の引出しに相違ない』と彼は考えた。『してみると、かぎは右のポケットにしまっているんだ……みんな一束にして、鉄の輪に通している……あの中に、ほかのどれよりも三倍から大きい、ぎざぎざの歯をしたのが一つあるが、むろんあれはたんすのじゃない……つまり何かほかに手箱か、長持みたいなものがあるに相違ない……ふん、こいつはおもしろいぞ。長持にはたいいあんなががついているものだて……だが、これはまあなんといいさしいことだ……』

老婆はひっかえして来た。

「さてと——一か月十コペイカとして、一ルーブリ半で十五コペイカ、ひと月分天引きしますよ。それから前の二ルーブリの口も同じ割で、もう二十コペイカし引くと、都合みんな三十五コペイカ、そこで、今あの時計でお前さんの手にはいる金は、一ルーブリ十五コペイカになる勘定ですよ。さあ、受け取んなさい」

「へえ！ それじゃこんどは一ルーブリ十五コペイカなんですか」

「ああ、そのとおりですよ」

青年は争おうともせず、金を受け取った。彼はじつと老婆を見つめながら、まだ何かいうことかすることでもあるように、急いで帰ろうとしなかった。もつとも、その用事がなんであるのか、自分でも知らないらしい様子だった……

「ことによるとね、アリョーナ・イヴァーノフナ、近いうちにもうひと品もって来るかもしれないよ……銀の……りっぱな……巻きたばこ入れ……今に友だちから取り返してきたら……」

彼はへどもどして、口をつぐんだ。

「まあ、それはまたその時の話にしましょうよ」

「じゃ、さようなら……ときに、おばあさんはいつもひとりなんです、ね、妹さんはるすですか？」控え室へ出ながら、できるだけざっくばらんに、彼はこうたずねた。

「お前さん妹に何かご用かね？」

「いや、べつに何も。ちょっと聞いてみただけです。だのにもうおばあさんはすぐ……さよなら、アリョーナ・イヴァーノフナ！」

ラスコーリニコフはすっかりまごついてしまつて、そこを出た。この惑乱した気持ちには、しだいにはげしくなつていった。階段をおりながらも、彼はとつぜん何かに打たれたように、幾度も立ちどまったほどである。やつと通りへ出てから、彼はとうとう口に出して叫んだ。

「ああ、じつに！ なんとというけがらわしいことだろう！ いったい、いったいおれが……いや、これはナンセンスだ、これは愚にもつかぬことだ！」と彼はきつぱりいいた。『まあこんな恐ろしい考えが、よくもおれの頭にうかんだものだ！ しかし、おれの心は、なんとけがらわしいことを考え出せるようにできていることか！ 何よりもだいいちに——けがらわしい、きたない、ああ、いやだ、いやだ！ しかし、おれはまるひと月……』

けれど、彼は言葉でも叫びでも、自分の興奮を現わすことができなかった。もう老婆のところへ出かけた時から、そろそろ彼の心を圧迫し濁濁させていたたとえようもない嫌悪の情が、今はものすごく大きな形に成長して、はつきりその正体を示してきたので、彼は悩ましさに身の置き場もないような気がした。彼はまるで酔漢のように、往き來の人に氣もつかず、ひとりひとりにぶつかりながら歩道をたどりたどつて、次の通りまで来たとき、ようやくはじめてわれにかえた。

彼はあたりを見まわして、とある酒場のそばに立っている自分に気がついた。そこへはいって行くには、歩道から石段をおり、地下室へおりるようになっていた。戸口からは、ちょうどこの時ふたりの酔漢が出て来て、互いにもたれ合つてのしり合いながら通りへ登つて来た。長くも思案しないで、ラスコーリニコフはそこへおりて行った。これまで一度も酒場へはいったことはなかったけれど、今はめまいがするうえに、焼けつくようなかわきに悩まされていたので、冷たいビールをあおりたくてたまらなくなった。そのうえ、とつぜんおそつてきた疲労の原因を、空腹のためと解釈したからである。彼は暗いきた

ない片すみの、ねばねばするテーブルの前に陣どってビールを命じ、むさばるように最初の一杯を飲み干した。と、たちまち気持ちがつかり落ちついて、考えがはっきりしてきた。『こんなことは何もかもばかかてゐる』と彼は希望を感じながらひとりごちた。『氣にやむことなんかちつともありません！ ただからだのぐあいがわるくなつてゐるだけなんだ！ わずか一杯のビールと、乾パンひと切れで——もうこのとおり、たちまち頭はたしかになる、意識ははっきりする、意志も強固になる！ ちよつ、何もかもじつにばかかてゐるわい！……』が、こうしてばかにしたような唾棄の態度をとつてはみたものの、彼はなにか恐ろしい重荷から急に解放されたように、急に様子がはればれしてきた。そして人なつかしげに一座の人々を見まわした。しかし彼はこの瞬間でさえ、物事をよいほうに取らうとするこの感受性も、やはり病的なものであることをかすかに予感していた。

このとき酒場にはあまり人がいなかった。階段で出会つたあのふたりの酔漢のあとから、女をひとり連れて手風琴をたずさえた五人組の連中が一時にどやどやと出て行つたので、あとは静かにゆつたりとなつた。あとに残つたのは——ビールを前に腰かけているほろ酔いの町人体の男と、シベリヤふうの帽子をかぶり、灰色のあごひげをはやした、大柄なふとつた連れの男だった。連れの男はひどく酔いがまわつて、ベンチの上でうとうとしながら、ときどき夢うつつで急に指をばちりと鳴らし、両手を左右にひろげて、ベンチから身を起そうともせず、上平身ではねあがるようなかつこうをした。それといつしよに、文句を思い出そうとあせりながら、ばかげた歌をうたうのであった。

まるまる一年、女房をかわいがつたよう……

まるまる一年、女房をかわいがつたよう！……

かと思うと、急にまた目をさまして、

ボジャー・チエスカヤを歩いていると
もとのなじみに出会つた……

けれど、だれひとり彼の幸福に共鳴するものはなかった。無口な連れの男は、こうした感興の突発をむしろ敵意ありげな、うさんくさい目つきでながめていた。そこにはもうひとり、退職官吏らしい男がいた。びんを前にひかえて、ときどきぐつと一口のんでは、あたりを見まわしながら、ひとりばつねんと座をしめてゐる。彼もどうやら興奮しているようであつた。

2

ラスコーリニコフはがやがやした場所になれていなかった。前にも述べたとおり、なべて他人といつしよになるのを避けていたし、ことに最近はそのがひどかつた。ところがこの時は、とつぜん急に人なつかしい気持ちになつた。何か新しいあるものが彼の心中におこり、それとともに、人間にたいする一種の渴望が感じられたのである。彼はまるひと月というものの、あのこり固まつた憂愁と暗い興奮に疲れはてて、たとい一分間でも、どんな所であろうと、違つた世界で休息したかつた。で、不潔をきわめた環境にもかかわらず、彼は満足してこの酒場に腰をすえた。

店の亭主は別室にいたが、どこからか段々を伝わって、ちよいちよい店のほうへおきて来た。そのたびに、まず何より先に、大きな赤い折り返しつきの、墨をてかてか塗つたしゃれた長ぐつが現れた。彼は半外套を着こみ、恐ろしく油じみた黒じゆすのチョッキにネクタイなしでいたが、その顔ぜんたいが油でてらてらしている鉄の錠前みたいであつた。帳場の向こうには十四ばかりの小僧がいたが、そのほかにもひとり、注文があると品物を運ぶ年下の子供がいた。そこには小さなきゅうりと、黒い乾パンと、小さく切つた魚がおいてあつて、そ

れが恐ろしくぶんぶんにおった。店の中は息ぐるしく、じっとすわっていられないほどだった。それに、何もかも酒の香がしみこんで、その空気だけでも、五分もたったら酔ってしまいそうに思われた。

この世には、一面識もない人でありながら、口もきかぬ先から急に一目みただけで興味を感じだすという、一ぶう変わった邂逅があるものである。やや離れて陣どっている退職官吏らしい例の客が、ちょうどそういったような印象をラスコーリニコフに与えた。青年はその後いくたびかこの第一印象を思いおこして、それを虫のしらせだとさえ思った。彼はたえず官吏のほうをながめた。むろんそれは、先方でも彼をじっと見つめて、話したくてたまらないらしいのが、ありありと見えていたからでもある。そこにいわせたまはかの者にたいしては(拿主をもひつくるめて)、官吏はなれつこになった様子で、さもあきあきしたというような態度をとっていた。またそれと同時に、一種傲慢な軽蔑の色さえうかべて、てんから相手にならぬほど低い階級の教養に欠けた連中をあしらうようなそぶりを見せていた。それはもう五十を越した、中背のがつしりした体格の男で、白髪頭に大きなはげがあった。年じゅう酒びたしになっているために、ふやけたようなその顔は、黄色というよりはむしろ青みがかった色をしている。はればつしたいまぶたの奥から、小さい裂けめのような、とはいえ、いきいきとした赤い目が光っていた。けれど、この男には一種きわめて不可思議なところがあった。ほかでもない、彼のまなざしには感激らしいものすら輝いているのだ。——おそらく思慮も分別もあったかもしれない——しかし、またそれと同時に、気がいめいたひらめきもあった。彼はぼろぼろに破れて、ボタンもとれてしまった黒の燕尾服を着ていた。ボタンはたった一つだけ、どうにかこうにかくっついていて、いかにもたしなみを捨ててしまふまいとするように、それをきちんとかけていた。ナンキンもめんのチョッキの下からは、よごれてしわくちゃの、おまけに酒のしみだらけになったシャツのえりがはみ出してゐる。顔は官吏ふうにそりあげてあったが、それもないぶ前のことと

みえ、鳩羽色のこわそうな毛がもしやと伸びかけている。それに全体の物腰には、じつさい、どことなくどっしりとした官吏ふうなところがあった。けれど彼はそわそわした様子で、しきりに頭の毛をくしゃくしゃき散らし、ときどき悩ましげに、ぬれてべとべとするテーパーの上に、ひじの抜けた両腕を突っぱるのであった。とうとう彼はまともにラスコーリニコフを見すえて、大きな声で、きっぱりと言葉をかけた。

「ぶしつけですが、あなた一つわたしの話相手になっていただけませんか？ お見受けしたところ、ご様子はあまりぞっとしておいでにならなうが、わたしは年の功でもって、あなたが教育のある人で、酒類にはあまりなれておられんように想像しますが。わたしもつねづねから、誠意を兼ね備えた教養を尊重しているもので、九等官マルメラードフ——こういう姓なんで、九等官ですよ。あなたは、失礼ですが、お勤めですか？」

「いや、勉強中です……」と青年は答えた。相手の一種特別なくだかしい話しぶりと、あまりまともに押しつよく呼びかけられたのに、いささか面くらって、つい今の今まで、どんな人とも話してみたいと思っていたにもかかわらず、さていよいよほんとうに言葉をかけられると、たちまちいつもの不愉快な、いらだたしい嫌悪の情に襲われた。それは彼の個性に触れるか、あるいは触れようとする、すべての他人にたいして感じるものであった。

「してみると、学生さんですね、大学生あたり！」と官吏は叫んだ。「わたしもそう思いましたよ！ 年の功、長い間の年功ですて！」と彼は得意そうに額へ指を一本あてた。「あなたは大学生だったのか、でなけりや、ひと通り学問をしてきたかたですな！ どれ、ひとつごめんをこうむって……」

彼は立ちあがって、よろよろとしながら、自分のびんとコップを引つつかみ、青年のそばへやって来て、ややはずかしく座をしめた。彼は酔っていたが、雄弁に元氣よくしゃべった。ただときどき、いく

らかまごついて、言葉伸ばしたくないものである。彼はなんだから、むさばるようにラスコーリニコフにからんできた。やはりまるひと月も、人と話をしなかったようなあんばいだった。

「なあ、学生さん」と彼はほとんど勝ち誇ったような調子ではじめた。「貧は悪徳ならずというのは、真理ですなあ。わたしも酔っぱらうのが徳行でないのは、百も承知しとります。いや、そのほうがいっそう真理なくらいです。ところで、洗うがごとき赤貧となるとね、学生さん、洗うがごとき赤貧となると——これは不徳ですな。貧乏のうちは、持つて生まれた感情の高潔さというものを保っておられるが、素寒貧となると、だれだってそうはいきません。素寒貧となると、もう人間社会から棒でたたき出されるでなく、ほうきで掃き出されてしまいます。つまり、ひとしお骨身にしみるようにね。しかし、それが当然な話で、素寒貧となると、だいいち自分のほうで自分を侮辱する気になりますからな。そこでつまり酒ということになるんです。なあ、あんた、ひと月ばかり前、てまえの家内をレベジャートニコフ氏が打ちましたよ。ところが、家内はてまえのような人間じゃないんです！　ようがすかな？　そこでもう一つ、いわばもの好き半分におたずねさしていただきますが——あんたはネヴァの乾草舟にお泊まんすったことがありますか？」

「いや、ありませんよ」とラスコーリニコフは答えた。「そりやどういうことです？」

「じつは……わたしはそこからやって来たんで、もう五晩めですよ……」

彼はコップに一杯ついで、それを飲み干すと、考えこんでしまつた。じっさい、彼の服ばかりか髪にさえも、そこここにこびりついている乾草の葉が見分けられた。彼が五日のあいだ着がえもせず、顔も洗わないでいたことは明白すぎるくらい、ことにつめ黒くなった、あぶらじみてどす赤い手は、ひどくきたならしかった。

彼の物語は一同の注意をひいたらしい。もつとも、ものぐさそうな

注意ではあった。小僧たちは帳場の向こうでひひひと笑いだした。亭主はわざわざ上の部屋から、『愛嬌者』の話の聞きにおりて来たらしく、けだるそうではあるが、もったいぶったあくびをしながら、少し離れて腰をおろした。察するところ、マルメラードフはこの古なじみらしかった。それに、彼の話がぐくぐくしたくなったのも、おそらくいろいろの見も知らぬ人たちと、のべつくだを巻く習慣からきたものらしい。この習慣はある種の酒飲みにとっては、欠くべからざる要求になっている。とりわけ、家でもきびしくあつかわれたり虐待されたりしている連中は、なおさらそうなのである。つまりそのために、彼らは常に飲み仲間から慰藉を求めよう、できることなら尊敬さえもかちえようと、一生けんめいになるのである。

「愛嬌者！」と大きな声で亭主はいった。「だが、お前もお役人なら、なんだって働かねえんだい、なんだって勤めに出ねえんだい？」

「なぜ勤めに出ないって？　ねえ、学生さん」とマルメラードフは、おもにラスコーリニコフのほうへ向きながら答えた——あたかも彼がこの質問を出したかのように。「なぜ勤めに出ないって？　いったいわしがなんの働きもなく、のらくらしていながら、いっこうけろりとしておるとでもおっしゃるんですかい？　ひと月前に、レベジャートニコフ氏が家内を打ったときにも、わしは酔っぱらって寝ておったが、そのわしが平気でしたと思えますかね？　失礼ながら、学生さん、あんたにこんなことはなかったかね……その……まあ早い話が、あてのない借金をしようとなさったことが？」

「ありましたよ……でもつまり、どうあてがないのです？」

「つまり、てんであてがないので。前からどうにもならないのを承知でやるんですな。たとえばだれそれ——その、志操堅固な公民で国家有用の材といわれるだれそれは、こんりんぎい金なんか貸さんということが、前もってよくわかつている。だって、あんた、なんのために貸すわけがありますね、ひとづうかがいたいもんで？　先方じゃわしが返さんことを承知しとるんですからなあ。惻隱の念からでも貸す

だろうとおっしゃるんですかい？ なあに新思想を追っているレベジャートニコフ氏などは、こんなに同情などというものは学問上ですら禁じられておつて、経済学の發達しておる英國ではもうそのとおり実行しておつて、このあいだも説明してくれましたよ。そこでうかがいますが、そうしたら、どうしてその先生が貸してくれませんか？ ところがです、前から貸さんがわかつておりながら、やはりこのこ出かけて行く……」

「なんのために出かけるんです？」とラスコーリニコフは言葉をはきんだ。

「だって、だれのどこへも行くあてがないとしたら、どこへもほかに行く先がないとしたら！ そんな人間にしろ、せめてどこかしら行くところがなくちゃ、やりきれませんからな。まったく、ぜひとどこかへ行かにならんとするような、そうした場合があるもんでがすよ！ わしのひとり娘がはじめて黄いろい鑑札（准光婦の鑑札）をもつて出かけて行ったとき、その時わしもやっぱり出かけたよ……（というのは、娘は黄いろい鑑札で食つてゐるんで！）」と彼は一種不安らしい目つきで青年を見ながら、但し書きと云つたふうにつけくわえた。「かまいません。あんた、かまいませんよ！」帳場の向こうでふたりの小僧がぶつと吹き出し、亭主までがにやりとしたときに、彼はせきこみながら、しかし見かけはいかにも落ちつきすまして、こういいきつた。「なに、かまうことはありませんよ！ あんな目いきそでひきくらいに、驚きやしませんやな！ もう何もかも知られてゐるんだから、秘中の秘までも知れわたつてゐるんだから。だから、わしは軽蔑どころか、へりくだつた心もちでそれを受けておるんですよ。かまいません！ かまいません！ 『これも人なり』ですて！ ときに、あなた、どうです——あなたはおできになりますか……いや、もっと強く、もっと適切に言えばですな……おできになりますかじやない、その勇気がおありになりますか——今このわしを見ながら、わしが豚でないと言ふだけの勇気が！」

青年はひと言も答えなかった。

「さて」と部屋の中にふたたびおこったひひ笑いの終わるのを待つて、弁者はさらに一倍の尊厳さえ帯びた調子で、どつしりと言葉をづづけた。「さて、わしは豚でしさいはないが、あれは貴婦人ですよ！ わしは獣の相を帯びておるが、家内のカチエリーナ・イヴァーノヴナは——佐官の娘に生まれた、教育のある婦人ですぞ。わしはやくぎものでしさいはない、しさいはないとしても、あれはりっぱな魂を持つておつて、教育で高められた感情にあふれておる。とはいふものの……ああ、あれが、もう少しわしをかわいそうに思つてくれたらなあ！

なあ、学生さん、どんな人間にだつて、よしんばただのひとところだけでも、他人からいたわつてもらえるところがなくちゃなりませんかな！ それなのにカチエリーナは、あれほど心のひろい女でありながら、へんくつなところがあります……しかし、わしはちゃんとわかつとる……あいつがわしの髪をとつて、引きずりまわすのは、要するに憐憫の心から出ることにはかならん、それは自分でも承知しております。まったくのところ、わしはあえて平然とくりかえすが、あいつはわしの髪をとつて引きずりまわすので、あたりのいひひ笑いを聞きつけて、さらにもつたらしい表情を加えながら彼は念を押した。

「しかし、それにしても、ああ、もしあれがたとい一度でも……いや！ いや！ それはみんなむだだ、今さらいうがものはない！ なんにもいうがものはない……わしの思いどおりになったことも一度や二度じゃない。人からふびんがつもつたことも一度や二度じゃない。しかし、それにしても……いや、これがわしの持つて生まれた性根なんだ。わしは生まれながらの畜生なんだ！」

「でなくつてさ！」とあくびまじりに亭主が口をはさんだ。

マルメラードフは決然たる態度で、どんと一つげんこでテーブルをたたいた。

「これがわしの性根なんだ。どうです、あなた、びっくりしちゃういませんかよ、わしは家内のくつ下まで飲んでしまつたんですぜ！ くつ

なんかは、まだいくらか定式どおりという気がしますが、くつ下まで、女房のくつ下まで飲んじまったんですからなあ！それから、山羊の毛皮のえり巻も飲んじましたよ。以前人からもらったものだから、まったくあいつのもので、わしのものじゃないんで。ところで、わしたち一家は、寒い部屋に間借りしてるので、女房はこの冬かぜをひきましてな、せきがひどく、はては咯血するまでになった。子供は小さいのが三人おるので、カチエリーナは朝から晩まで働きづめでがす。小さい時分から身ぎれいに育てられたので、こそこそ掃除をしたり、雑巾がけをしたり、子供に湯を使わしたりしておりますが、胸が弱いほうでしてな、結核になりやすいたちなんです。わしもこれが気になるんですがすよ！これを気にせんでおられましようかい？飲めば飲むほどますます気になる。わしが酒を飲むのは、つまり酔いの中に憐憫と感傷を求めるためなんです……深く苦しみたいために飲むのがすよ！」こういいながら、彼は絶望したようにテーブルの上へ頭を伏せた。

「学生さん」彼はまた頭を上げ言葉をつづけた。「わしはあんたの顔に、何やら悲しそうな色が読めるんですがね。はいつてこられたとたんにそれが読めたから、まあ、さっそく話しかけたようなわけですが。なんせ、あなたに自分の身の上話をしたのも、今さらいわずとも知り抜いているそこのやじ馬どもに、おのれの恥をさらしたいためじゃござせん。ものに感じる心を持った教育のある人をさがしているからなんです。じつは、家内は由緒ある県立の貴族女学校で教育を受けてましてな、卒業の時には、知事さんやその他の人たちの前でヴェールの舞をしたというので、金のメダルと賞状をもらったくらいですがすよ。メダルのほうは……さよう、メダルのほうは売ってしまいましたが……もうどうの昔にな……ふん！……が、賞状のほうはいまだにあれのトランクの中にしまっておりましてな、ついこの間も主婦さんに見せておりましたっけ。主婦さんとはのべつ幕なしにけんかばかりしてゐるんだが、それでも、あいつはだれか他人の前でひとじまんして、昔

の仕合わせな時代を吹聴したかったものでがしよ。わしもそれとがめ立てなどしやしません、けつしてとがめ立てはせんです。なにしろ、これがたった一つ思い出の中に残っておるだけで、ほかのものは何もかもけしとんでしまっただけですからなあ！さよう、さよう、あれは癪性で、氣位が高くて、負けずぎらいな女ですよ。自分で床板は洗っても、黒パンはかじつても、他人の無礼な仕うちにはさし置くことじゃありません。ですから、レベジャートニコフ氏にだって、無作法を許しておかなかったわけですが。レベジャートニコフ氏があれをなぐったとき、家内はなぐられたためというより、くやしさが胸にしみてどつと床についたのです。もともと幼い子供を三人かかえて後家では好きでいっしょになった仲なので、あれは男と手を取り合って親の家をかけおちまですしたのがです。あれは心から底から亭主を好いておりましたが、男は賭博カルタをはじめて裁判にまでひつかかり、そんな有様で死にまっただか。晩年には男もあれを打ち打擲したそうだが、あれのほうもなかなかあまい顔ばかりしていなかったらしい。そのことは、わしもすっかりした証拠を握って確かに知っておりますがな、しかしあれは今でも思い出すと涙ぐんで、その男とひき比べてわしを責めたりします。だが、わしはむしろ喜んでおりますよ、喜んで。というのは、あれがせめて空想の中だけでも、自分は昔仕合わせだったと考えるのがうれしいのでね……そういうわけで、男の死後あれは三人の幼いものを抱えて、ある遠い辺鄙な田舎に残された。わしは当時おなじ土地に住んでおりましたが、そのはじめの有様といったら、わしもずいぶんいろんなことを見てきたものの、とても言葉につくせないくらいでがしたよ。親戚にもみんな見はなされてしまったのでね。ところが、あれは氣位が高うがした。人なみはずれて高うがしたよ……つまりその時、あなた、その時わしも、先の家内にできた十四の娘を抱えたやもめでしたが、あれの苦しんでおるのを見るに見かねて、こちらから結婚を申し込んだ。ところがですな、その育ち